

第10課「霊の結ぶ実は節制」

* 「節制」と言う言葉を聞くと耳が痛いのは私だけではないと思う。いかに罪人が善からぬ欲求から離れる事が難しいか、自分自身のこれまでを振り返って見たとき実感させられてしまう。そもそも「欲求」は神が与えて下さったものであり、私たちが今以上に向上してゆく（成長してゆく）ために必要なものである。しかし、罪は欲求を歪め、その対象を本来のもの（自己向上）から他のもの（向上を妨げるもの）に向けさせ、あるいは極端にさせてしまい、結果的に私たちが滅ぼす武器となっている。その防御として神は「節制」を示される。

1. 罪に対する欲求

- **「罪」依存症に対する処方箋**：「罪」は、悔い改めた後、何度も繰り返してしまう依存症のようなものである。悪いと分かっているのだが、心のどこかで求めてしまっている。依存するかのようには離れられない。依存症の治療は、依存しているものを絶対に行なわない事だと言われる。長年依存しているものからは離れていたとしても、少しでも行なうことによってその病が再び起こってしまうと言われている。罪に対する特效薬はイエス・キリストである事は異論のないところだと思う。イエスの模範を通して、私たちは罪から守られる術を知る。「節制」はその一つであって、私たちは辛抱強くイエスの模範に従ってゆく。
- **「節制」とは**：「度を越さないように控えめにする」「欲望を理性によって秩序あるものとする」（以上「大辞泉」より）とある（聖書研究ガイドでは「自制」「理性の力」「意思の力」とある）。聖書においては「世も世にあるものも愛してはいけません」（1ヨハネ2：15）とあり、神へ注がれるべき愛が、他にそれしてしまう①肉の欲：倫理的な意味での欲望（肉体はしばしば罪の性質の道具となる。ローマ6：6、6：13、12：1）②目の欲：私たちの営みは90%を視覚に頼るほどに見る事による影響は大きい。また見えるところしか見ない、つまり表面しか見られない。③生活のおごり：むなしい誇り、虚栄、見えはり、この世の富など。これらは全て罪への誘惑に用いられるものである。それらの誘惑から自身を守るものが「節制」である。
- **キリスト者の求める美德**：「節制」は「従順」である事が必須である。そこには同時に自分自身を顧みることによる「謙遜」（へりくだり）が伴う。これは、イエスの十字架に臨む時の模範でもある。
- **罪を恐れる**：フィリピ2：12における「恐れおののきつつ」という言葉に注目したい。私たちは罪が恐ろしいもの、悲しむべきもの、避けるべきものである事を自覚しているだろうか。実は、はっきり知らない。だから罪を繰り返すのかもしれない。生まれたときから罪の中に生きている罪人の私たちは、罪の結果を体験する事で、罪のむなしさ、怖さを実感する。知る、見るだけではなかなか自覚することはできない。罪を克服し、勝利するにはイエスに頼る他無い。聖霊は、そのイエスに私たちを導く。私たちは、その導きにいかに従うか、そこにキリスト者の神に対する従順の必要を見る。

2. ヨセフとサムソン

- **ヨセフの模範**：自分の運命（過去の歩みとこれからの展望）に対して嘆く人がいる。たとえ、今までそうであったとしても、本当にこれからも望みは無いのだろうか。ヨセフの人生はそれを否定する。兄たちに裏切られ、エジプトに奴隷として売られたヨセフは、どんな境遇にあっても、父の教え（神についての）を忘れる事無かった。大きな試みの際（創世39：7～20）、それは彼の「節制」を脅かしたが、罪を犯す事は裏切り（主人と神に対する）であると毅然とした態度で誘惑を退けた。その結果、あらぬ嫌疑で投獄される。しかし、罪に対して「節制」をなすヨセフを、神は祝福し導かれて行った。神は万事を益としてくださる（ローマ8：28、1テモテ4：8）。一見不幸に見えるその向こうに神は幸いを置き、そこに導かれる。
- **サムソンの模範（反面教師）**：彼はイスラエルの士師として、神から特別な恵み（権威、超人的な肉体、素晴らしい能力など）を受けていた。神の恵みを自分のために用いることにより、あらゆる誘惑が彼を襲い、それを受け入れた。それはあらゆる不道德（酒、女、博打、金、快楽など）と傲慢をほしいままにした。ある意味で罪人が理想とする事を好きなようにした。しかしその結末は哀れなものであった事を私たちは知っている（士師13～16章）。私たちがもそれぞれに応じて神から祝福や恵み（タラント）を与えられている。これをどのように用いているか、生かしているか、無駄な使い方をしていないか、どうして神は私にタラントをあたえられているのか、なぜ私を導いておられるのか、忍耐しつつ支え続けているのか、よく考えてみたい。

3. 人生はマラソン（1コリント9：24～27）

- **私たちはアスリート**：アスリートは章を得るために必死になって「節制」する。私たちの人生をマラソンに例えると、私たちはランナーである。神は全ての者が完走する事を期待される。走り方や、そのペースは様々だが、いかに走り抜くかを神はごらんになる。転んでも起き上がる。迷ってももとのコースに戻る。疲れても前進し続ける（歩いてでも）。そんな私たちに神は力を与え続け、支え続け、共に伴走して下さっている。人生というレースを完走する全ての者に、神は勝利の栄冠を用意し、天国というゴールテープに飛び込んでくるのを待っておられる。
- **絡みつく重荷を振りほどいて**：罪は私たちの足に絡みつくもの、重荷となるものである。その重荷は人によって異なる。あなたの重荷はいったい何なのだろうか？経済？人間関係？競争？私たちは、自分にとって何が重荷になっているかを見極める事が必要である（ヘブライ12：1）。古い人（罪を愛する私）を脱ぎ捨て、作り手の姿に倣う新しい人（キリストの模範に従う救われた罪人）を身につける（コロサイ3：9～10）。日毎にイエスに倣い、イエスによる真の神を知る知識を得る事が私たちの真の喜びと幸福に繋がってゆく。